国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成22年9月1日発行　第34巻第9号通巻第396号

月刊みんぱく

2010 9月号

特集

特別展 **彫刻家エル・アナツイのアフリカ**
——アートと文化をめぐる旅

旅はエル・アナツイから始まる　川口 幸也
エル・アナツイに聞く　聞き手・川口 幸也
歴史とアートのはざまで制作すること　竹沢 尚一郎
圧倒的な出現性—エル・アナツイと現代美術　水沢 勉
アナツイ工房の職人たち　松本 尚之
エル・アナツイのアトリエ　渋谷 拓
ガーナを訪ねて　朝木 由香

エッセイ 千字文

バリ島の思い出

太田治子（おおた はるこ）

プロフィール
神奈川県生まれ。明治学院大学文学部卒業。1976年～79年、NHK教育テレビ「日曜美術館」の司会アシスタントを務める。1986年『心映えの記』で第1回坪田譲治文学賞受賞。主な著書に『母の万年筆』『私のヨーロッパ美術紀行』『絵の中の人生』『恋する手』『青い絵葉書』『小さな神さま』『石の花』最新刊は『明るい方へ』。

バリ島に、もう一度あいたい女性がいる。およそ十年前、当時中学生だった娘の万里子と女二人、四日間のバリ島の旅にでかけた。その時、ガイドをして下さったカディックさんである。まだ結婚まもないというカディックさんは、バリ島の日本語学校で日本語を覚えたと話していた。とても奇麗な日本語であった。何よりも、心が美しい女性だったと思う。四日間というものずっとカディックさんと行動を共にしたがいつも穏やかで優しく初対面の人に感じるあの息苦しさを一秒とて感じたことがなかった。

「太田さんは、日本の女性の感じがしません。こちらの人のように思えます」

カディックさんはそういって、私の手を握った。冷たい手だった。

「私、体温がとても低いです。おかあさんになれるでしょうか」

「それは、大丈夫でしょう」

すぐにそう答えながら、少し心配になった。こんなに冷たい手と握手したのは、初めてであった。バリ島の繁華街にあるレストランのテラスで、カディックさんと私たち母娘三人が夕食を食べている時だった。思わずレストランの壁を見上げると、一匹のやもりがじっと三人の話しに耳を傾けていた。

カディックさんは、その日私たちをとある村の籐職人の家へ案内したことを後悔しているようだった。あんなに高い値段をいってと、カディックさんは憤慨していた。バリの籐製品を買いたいといったのは、私である。

籐の持つぬくもりが好きだった。晩年の母が籐椅子でまどろんでいたことを思い出しながら、私はその椅子によく似た籐椅子をみつめていたのである。小柄な主人が近付いてきた。カディックさんからその値段を聞いて、私はびっくりした。日本のデパートで買った方がまだ安いという値段だった。勿論買わなかった。あの値段をいう時のにんまりとずるそうな目付きは、とてもバリの人とは思われなかった。バリは観光地でありながらそれはのどかで、おっとりしていたところであった。バリにも、お金もうけを第一に考える人ができていると力ディックさんはいった。

それから数年して、カディックさんと食事をしたレストランの近くでテロの爆破事件が起きた。多くの死傷者がでた。カディックさんは、大丈夫だったろうか。きっとおかあさんになって今もガイドを続けていることを、信じているのである。

月刊 みんぱく 9月号目次

1 エッセイ　千字文
バリ島の思い出　太田 治子

特集
特別展 彫刻家エル・アナツイのアフリカ
――アートと文化をめぐる旅

3 旅はエル・アナツイから始まる　川口 幸也
4 エル・アナツイに聞く　聞き手・川口 幸也
5 歴史とアートのはざまで制作すること　竹沢 尚一郎
6 圧倒的な出現性――エル・アナツイと現代美術　水沢 勉
7 アナツイ工房の職人たち　松本 尚之
8 エル・アナツイのアトリエ　渋谷 拓
9 ガーナを訪ねて　朝木 由香

10 研究フォーラム
インド大躍進の光と影
「現代インド地域研究」プロジェクト
三尾 稔

12 みんぱく Information
14 地球ミュージアム紀行
世相史を語る台湾故事館
久保 正敏
15 みんぱく 私の逸品
マヤの貫頭衣（女性用ウィピル）
園田 直子
16 散策と思索の径
よみがえる「華洋雑居」の記憶・上海
井口 淳子
18 多文化をささえる人びと
足元から多文化共生を積み上げる
世代交代した APFS の今とこれから
渡戸 一郎
20 歳時世相篇
敬老精神
鈴木 七美
22 フィールドで考える
あんたはウジャンジャ
小川 さやか
24 次号予告・編集後記

特集

特別展 彫刻家エル・アナツイのアフリカ

――アートと文化をめぐる旅

ガーナ生まれでナイジェリア在住の彫刻家エル・アナツイ（一九四四～）は、近年、ワインやビールの瓶（びん）のふた、あるいはシールなどの廃品を使い、優美でスケールの大きな織物を織りあげることで知られており、いまやアフリカのみならず、世界的にももっともめざましい活躍を見せるアーティストのひとりである。

とはいえ、アートワールドにおけるアフリカのアーティストたちの居場所は、しばしば美術館と博物館のあいだで宙づりになっている。今回の特別展では、そうした状況を見据えながら、エル・アナツイというアーティストの作品世界を、美術史と文化人類学の双方の視点から語ることにより、美術史と文化人類学、美術館と民族学博物館の新しい創造的な協力関係を模索する。

「マジシャン・ドゥ・ラ・テール」展の展示風景（ラ・ヴィレット会場）©Hisashi Ogura

ポンピドゥ・センターのエル・アナツイ作品

大英博物館に展示されたエル・アナツイの作品「男の布」（アルミニウム、銅線 1998-2001）

自作「オゾン層」（アルミニウム、銅線 2010 年）の前に立つエル・アナツイ（撮影・杉浦正和）

旅はエル・アナツイから始まる

川口 幸也（かわぐち ゆきや） 民博 文化資源研究センター

アフリカ現代美術の旗手

同時代のアフリカ美術が注目を浴びるようになったのは、わりあい最近のことである。その転機となったのは、一九八九年、パリでおこなわれた「マジシャン・ドゥ・ラ・テール（大地の魔術師）」展であった。この展覧会にはアジア、アフリカなどを含む世界じゅうから一〇〇人の現存するアーティストが招かれたのだが、そのうち一七人がアフリカのアーティストだったのである。これを境にして、ザイール（現在のコンゴ民主共和国）の看板絵かきシェリ・サンバやセメントの墓標彫刻で知られるナイジェリアのサンディ・ジャック・アクパンたちは、アフリカ現代美術の旗手として各国の美術関係者から引っ張りだこになった。シェリ・サンバの絵は、今ではニューヨークの近代美術館やパリのポンピドゥ・センターのコレクションにも収まっている。ただし、彼らはいずれも民衆芸術の担い手であり、地元ではもっぱら職人と目されていたのである。

エル・アナツイ登場

一九九〇年代に入ると、アフリカ現代美術はちょっとしたブームとなり、展覧会や出版、シンポジウムが欧米や日本で相次いでおこなわれた。それに伴い、美術学校や大学の美術学部で専門の教育を受けたアーティストにも追い風が吹き始める。一九九〇年、現代美術の最高の舞台として知られるヴェネツィア・ビエンナーレが、ついに一〇〇年近い歴史においてはじめてサブ・サハラのアーティストに扉を開いた。この年、ヴェネツィアには五人のアフリカ人アーティストが招かれたのだが、その一人がエル・アナツイであった。

アナツイは一九四四年、ガーナ東南部の小さな町アニャコに生まれ、近くのアンロガで牧師をしていたおじの下で少年時代を送った後、アサンテ王国の古都として知られるクマシにある科学技術大学の美術学部に進み、彫刻を学んだ。卒業後はしばらくガーナに留（とど）まったが、一九七五年にナイジェリア東部のンスカの大学に職をえて、以来そこで、今日まで忙しい日々を送っている。

「あてどなき宿命の旅路」（木、ゴム 1995　世田谷美術館蔵）

想像力の架け橋

一九九〇年代までは木の彫刻が多かったアナツイだが、近年ではもっぱら空き缶のふたや、ワインやビールの瓶のふた、あるいはシールなど、アフリカならどこにでも転がっている廃品を使って美しい織物を織りあげ、インスタレーションとして発表することで知られている。

織物といえば、西アフリカはその宝庫である。とりわけアサンテやエウェの人びとが産みだすケンテクロスは名高い。ケンテクロスは単なる布ではなく、儀礼的、象徴的な意味合いの強い特別な存在であり、描かれた個々のモティーフには歴史や道徳、習わし、宗教上の教えなど独特の意味が込められている。また抽象的な記号を染めこんだアカンの人びとの染物アジンクラも、固有の意味と味わいをもっている。織物や染物は、彼らにとっては歴史と文化の結晶なのである。

もとより、空き缶や空き瓶、またペットボトルなどの廃品を再利用するというのは、アフリカではごく普通に見られる生活文化である。他方、同じように廃品を使ってアートを造るというのは、西洋の二〇世紀美術にはおなじみの手法であった。アナツイは、アフリカの文化を踏まえ、西洋の近代美術の流れに目配りしながら、ありふれた廃品と、伝統文化の精髄ともいうべきケンテクロスやアジンクラのあいだ

に、あざやかな想像力の橋を架けるのだ。

あらたな可能性を切り開く

二〇〇七年、アナツイはふたたびヴェネツィアに招かれた。そこで、彼は計三点の大きな織物を展示してみせた。もちろん素材は、いつもの通りワインやビールのふたとシールである。アナツイのインスタレーションは、その優美さとスケールの大きさで訪れた多くの観衆を圧倒した。今日、アフリカの現代美術はグローバルなアートワールドの一角を占めていることを、はっきりと見せつけたのである。

けれども、アフリカの現代美術をとりまく状況はいささか複雑だ。たとえばアナツイの織物は、パリのポンピドゥ・センターにも展示されているが、ロンドンの大英博物館のアフリカン・ギャラリーにも展示されている。このギャラリーは、歴史的に見れば民族学博物館である。一方、欧米の現代美術の作品が、近現代美術館と民族学博物館の双方に同時に展示されている例をわたしはあまり知らない。アフリカの美術関係者の一部が不満を漏らすように、アフリカの現代美術の居場所は、近現代美術館と民族学博物館、美術史と文化人類学のあいだで宙づりになっているのである。

今回の展覧会では、しかし、そうしたアフリカの現代美術をめぐる事情を「宙づり」と見るのではなく、あらたな可能性を切り開くチャレンジだと捉えて、あえてアーティスト、エル・アナツイを民族学博物館で取りあげる。そのことにより、アートを、美術史と文化人類学という複数の視点から語りたいと考えている。それは、美術史と文化人類学、近現代美術館と民族学博物館の創造的な協力関係を模索する試みであり、単一の特権的な語りが支配する場ではなく、複数の語りが共存しあう場の可能性をさぐる旅でもある。

とはいえ、なぜアフリカの現代美術なのか、という問いは残されたままである。今後、欧米や日本のアーティストもまた、複数の視座から語ることで、この問いに答えていかなければならないのだと思う。旅はまだ、始まったばかりである。

エル・アナツイに聞く（聞き手・川口幸也）

——アフリカの伝統美術に関心をもつきっかけはどのようなものでしたか？

クマシの大学では、もっぱら西洋のアカデミックな美術を学んだので、アフリカの伝統美術に触れる機会はあまりありませんでした。卒業するころになって、クマシにある文化センターに通い、展示されていたアサンテの伝統文化に接して、強い衝撃を受けました。そこで、卒業後の数年間は、ガーナの文化にちなんだ作品を造りました。

——なぜ廃品を使って作品を造っておられるのですか？

廃品を使って作品を造るのは、やはり、そこに何か精神的なものを感じるからです。というのは、それらは、すでに多くの人が手で触れていたものだからです。人の手が触れることで、人と人との触れあいが生まれているはずです。人びとの無意識のつながりといってもいいでしょう。そうした触れあいがモノに力を与えます。素材に宿っているそうした力が、作品の力になるのだと思います。

——人と人とのつながりが大事だと考えておられるのですね？

それは、制作の場面でもそうです。わたしは、小さな町の小さな工房で仕事をしていますが、一緒に働いている人同士がつながっていて、気持ちも互いにわかり合っています。そのことにわたしは満足しています。また、アーティストの仕事は作品を造ることですが、作品を見た人からの反応があります。わたしの作品を介して、見る人ともかかわりができ、つながっていくのは、とてもうれしいことなのです。

歴史とアートのはざまで制作すること

竹沢 尚一郎（たけざわ しょういちろう） 民博 先端人類科学研究部

独立ガーナの熱気

エル・アナツイの作品はしばしばアフリカの歴史にタイトルをとっている。なぜか。彼の経歴と、彼が生まれ育ったガーナの過去にその答えを求めよう。

アナツイは一九四四年、ガーナ東南部の港町アニャコに生まれている。幼いときに母をなくしたため、長老派教会の牧師のおじに引き取られて、少年時代をおくっている。

ガーナの独立は一九五七年。アフリカの統一と自律を掲げるパンアフリカニズムの旗手であったンクルマに率いられたガーナは、熱帯アフリカ最初の独立国であった。激しい熱気が一三歳のアナツイを包み込んだであろうことは、想像に難くない。

アジンクラとの出会い

成長したアナツイは、古都クマシの科学技術大学の美術学部に進学する。しかし彼は、大学で教えられる美術教育に飽き足らないものを感じていた。そこで教えられていたのは一〇〇パーセント西洋風の技法であり、美術史の理論であった。新しく独立を達成したガーナにはそぐわないのではないか。疑問を抱いた彼は、クマシの町をうろつき、小さなアートセンターでガーナの伝統布アジンクラに出会ったのである。

アジンクラとは、ガーナ南部のアカンの人びとが一七世紀以来織りつづけ、儀礼で用いていた布である。その表には、彼らの宇宙観や歴史的出来事、処世訓などをあらわすさまざまな象徴がスタンプされている。その紋様と含意のある意味作用に魅了されたアナツイは、五年のあいだ作業場に通い、アジンクラの技法と意味を習得したという。アナツイが独自のアート世界に開眼したきっかけであった。

異質なものを総合する

もし彼がガーナ独立の熱気に触れていなかったなら、ガーナの伝統布に関心をもったかはわからない。もし彼がアジンクラに出会わなかったなら、彼が独自の世界を築くアーティストとして世界的に認められるようになったかはわからない。わかっているのは、この出会いから、西洋とアフリカ、近代と伝統、歴史とアートという、異質なものを総合するアーティストとしてのアナツイが誕生したことである。

アジンクラのような布は、西アフリカの他の地域にもある。そのひとつが、マリの泥染め布ボゴランである。これもまた世界観や歴史的出来事などをあらわす象徴を用いることで、深い意味をもつ布である。またそれは、カソバネという現代アートの集団を生んだ点でも共通している。

西アフリカでは、北からイスラーム文明、南の海岸からヨーロッパ文明が浸透するなかで、過去の出来事を記憶し、共通の意識とアイデンティティをつくり出す必要が生じたのだろう。西アフリカの諸文化は文字を用いない文化であった。その代わりに、ドゴン、バンバラ、ボゾなどの社会では、さまざまな象徴が活用され、儀礼的に使用されていた。アナツイの独自の作品世界は、今は名を伝えられていない人びとの何世紀にも渡る努力を背景にもっているのである。

圧倒的な出現性
——エル・アナツイと現代美術

水沢 勉（みずさわ つとむ） 神奈川県立近代美術館副館長兼企画課長

ヴェネツィアでの出会い

現代アフリカを代表する彫刻家の一人として、すでにある程度親しんでいた名前のエル・アナツイが、わたしの視界にひときわ大きな存在となってあらわれたのは、二〇〇七年六月の第五七回ヴェネツィア・ビエンナーレの開幕のときのことである。メイン会場のひとつアルセナーレに展示された作品「Dusasa I」。八メートルを超える高さ、幅は一〇メートルを超えていた。それは驚くべき大きさを誇り、周囲をまさしく圧するものであった。

それ以上に驚異的であったのは、大航海時代の息吹を今なお感じさせるかつての造船所の空間に、しかも、ビザンチン美術の影響色濃いヴェネツィアという場所に、まったく異質の色彩の輝きが、偉大な歴史に彩られたこの都市の壮麗さに一歩も引けをとることなく、現代の表現として堂々とそこに出現していることであった。グスタフ・クリムトが、少女であったアルマ・シントラー（のちのグスタフ・マーラー夫人）に、生涯に一度だけのプロポーズをしたのは、一九世紀末のサン・マルコ広場の雑踏のなかであったことを思い出しながら、わたしはつい「アフリカのクリムト……」と呟いていた。

また、同時期にヴェネツィア市内のパラッツォ・フォルトゥニーで開催されていた「Artempo」という「芸術Arte」と「時間（時代）Tempo」を合成させたタイトルの展覧会を訪れてみると、そこでもアナツイの作品がわたしを最初に迎えてくれた。見上げる人びとの身長と比較するならば、おそらく一四×一六メートルは下らない途方もないスケールの作品である。アナツイは、既存の建物のファサードの面目をまったく別のものに変貌させてしまった。

「Dusasa I」2007年　アルセナーレでの展示

現在形のエネルギー

同じときに参加していたイリヤ&エミリア・カバコフ夫妻のアルセナーレでのインスタレーションと、同夫婦による「寛容の船」プロジェクトとして大運河に停泊していた古代風の木造船も、印象深い、すぐれた作品であったが、アナツイの作品から発せられる底知れないエネルギーにわたしは完全に打ちのめされてしまった。

そのほぼ一カ月前にパリのポンピドゥ・センターで見た新収蔵品のアナツイ作品がすっかり気の抜けたものに思えるようになった。パリでの評価は流行の追認であったが、このヴェネツィアでのアナツイ作品は、それまでに貯えられてきたエネルギーをまさに現在形で全開にしていたのだ。

歴史と文化の秘密

「つい」と書いたように、クリムトとの比較は、まったくのわたしの誤解であろう。アナツイの燦然たる作品は、高価な貴金属や宝石を使用したものではなく、ナイジェリアで日常的に入手することのできる廉価な材料を、しかも再生させたものなのだ。素材は、ゴミとして捨てられるはずの瓶のふたやシールといった廃材であり、それを細い銅線で丹念に繋いでいったのである。

金細工師の家に生まれ、世紀末の洗練の極にあったウィーンのクリムトと、ナイジェリアのンスカに拠点を置くアナツイは、ほぼ一世紀のときを隔て、まったく異質の空間を活動の場とする対蹠的な芸術家である。アナツイの作品の圧倒的な出現性を保証する、歴史と文化の秘密をこそ、今回の民博を皮切りに開始される日本巡回展を通じてわたしたちは正確に理解しなければならない。

アナツイ工房の職人たち

松本 尚之（まつもと ひさし） 横浜国立大学准教授

学園都市ンスカ

ナイジェリア南東地域の都市エヌグは、植民地時代には鉱山都市として発展し、現在でもエヌグ州の州都として栄えている。このエヌグから北へ約六〇キロ、車で一時間ほどの地に、アナツイが工房をかまえる学園都市ンスカがある。一九七五年にナイジェリアに渡ったアナツイは、以来ナイジェリア大学ンスカ校で教鞭（きょうべん）をとりながら、作品の制作を続けてきた。

職人たちの仕事

アナツイの工房では、数十人の若者が職人として働いている。彼らは毎日工房に来るわけではなく、時間があるときにやってきては制作の手伝いをする。

近年アナツイが手がけている巨大なインスタレーションの多くは、ナイジェリアに広く出回っている蒸留酒のボトルキャップやラベルを材料として用いている。アナツイは、地元のリサイクル工場から廃棄処分のキャップやラベルを、一キログラムあたり八〇～一〇〇ナイラ（一ナイラはおよそ〇・六円）で仕入れている。

作品の制作は、まず職人たちがこれらの材料をつなぎ合わせ、小さなパーツを作ることから始まる。例えば、作品「レッド・ブロック」や「オゾン層」のパーツは、一枚あたりの大きさがおよそ六〇センチメートル×九〇センチメートルの長方形で、二四〇枚のラベルを用いて作られる。職人たちは、作ったパーツの種類やその出来不出来に応じて、一枚あたり四〇〇～八〇〇ナイラの報酬を手にする。「レッド・ブロック」等のパーツの場合、慣れた職人ならば一日に五枚は作るという話で、日当としてはンスカ周辺では割の良い仕事とのことだ。

職人たちのなかには、ナイジェリア大学の美術学部に所属するアナツイの教え子たちがおり、手にした報酬を学費や生活費の足しにしている。その一方で、働き口を求めてやってきた地元ンスカの若者たちも職人として働いている。そうした若者たちが大学への進学を決めた際には、アナツイは勤務年数に応じた奨励金を出すこともある。

作品に込められた人と人とのつながり

ガーナのケンテクロスが約一〇センチメートル幅の細長い布をつなぎ合わせて作られるように、職人たちが準備したパーツは針金を使って縫い合わされ、一枚の大きな「布」となる。それをアナツイが着色したり、加工したりして、ひとつの作品へと仕上げていく。最後に、出来上がった作品は洗浄され、アナツイがサインをして完成となる。

「オゾン層」の大きさは約二三平方メートル。職人たちが作るパーツにすれば四二枚分、材料として使われるラベルの数は一万枚以上になる。これら、気が遠くなるほどの数のラベルを紡ぎあわせてアナツイの作品は生まれる。

アナツイは創作活動の重要なテーマとして、「目に見えない人と人とのつながり」を挙げている。廃品を材料として用いるのはそのためである。ボトルキャップやラベルは、酒の作り手や売り手、飲み手、輸送業者や廃品回収業者などの手を経て、アナツイの工房にやってくる。そして、最後に工房の職人たちの手を経て、作品の一部となるのである。われわれを圧倒する壮大な作品群は、それを支える職人たちの存在抜きには語れないだろう。

工房のあるンスカの遠景

エル・アナツイのアトリエ

渋谷 拓（しぶや たく） 埼玉県立近代美術館学芸員

パッキングを待つ作品

雨季の始まりの五月下旬、調査と作品の集荷のために訪れたエル・アナツイのアトリエは、制作途中の木彫や木片、針金、金属片であふれていた。平屋建ての屋内は六〇坪ぐらいの広さだろうか。口が開いた資材袋には、金属製のボトルキャップが詰め込まれているのが見える。日本での展覧会のためにパッキングを待つ作品は、パーツごとにまとめられていたり、壁を飾っていたりしている。雑然としてはいるが、それでも作品の送り出しのために、いつもよりは片付いているのだろう。

美術作品のオーラ

ミルク缶のフタやボトルキャップなどの金属片は、近年のアナツイの作品を構成する主要なエレメントだ。そのひとつひとつは、それだけではほとんど無価値な廃品なのだが、巨大な一枚の織物となり、壁を覆い、襞（ひだ）を纏（まと）ってきらきらと輝くとき、その織物は美術作品のオーラを帯びる。こうした作品では、アーティストとしてのアナツイの仕事は、金属片の集合から浮かび上がる図を構想するグランド・デザインの部分が大きな比重を占めているといえる。

マニュファクチュアの現場

かたや、モノとしての作品を構成するパーツを実際につくっているのは、アトリエで黙々と作業する青年たちだ。ひたすら金属片を折り曲げ、銅線でつなぎ、一枚のテキスタイルに織りあげる。作家によれば、アトリエでは二〇人ぐらいが働いている。彼らの多くは、アーティストとしてのアナツイの弟子ではない。作業量と困難度に応じて歩合制で働く者たちだ。アトリエを離れると、彼らはさまざまな職業についていくという。各々が気負いなく訪れ、それぞれ必要とするものを手にして去っていく。ここはそんな場所なのだ。

アトリエの青年たちは、アナツイの国際的名声や「アート」というものに格別関心を払っているようには見えない。シンプルに、生活のために働く、という感じだ。そう、現代美術の作家のアトリエというよりも、むしろマニュファクチュア（工場制手工業）の現場といった風情。見る者を一目で魅了する巨大な現代美術の作品が、伝統的な生産のありようを思わせる現場から生み出されていく。時代感覚がちょっと揺らいでくるようなギャップが、この上なく面白く感じられた。

資材袋に入ったボトルキャップ

アトリエで働く青年。1日10時間働くこともあるという

壁に掛かるレリーフ。手前は作業台に並ぶ顔料

ガーナを訪ねて

朝木 由香（あさき ゆか） 神奈川県立近代美術館学芸員

クマシでの制作風景 右：アナツイ（提供 エル・アナツイ）

アジンクラ　アクラの市場にて

アニャコ

作家の原風景

今年九月から民博で始まる「彫刻家エル・アナツイのアフリカ展」のため、わたしたち関係者は五月にナイジェリアに住む作家アナツイのアトリエと、彼の故郷ガーナを訪ねた。ガーナは三日間の滞在であったが、作家の原風景に触れる貴重な体験をした。

アナツイは一九四四年、首都アクラから二五〇キロほど離れたギニア湾沿いのアニャコで生まれた。ここは西アフリカで最大級のラグーンに浮かぶ、小さな半島のような独得な場所である。西日に傾きかけた静かな水辺には、子どもたちや漁の網を手入れする男たちの影がのびていた。わたしたちは作家の甥（おい）の案内で大勢の親族と面会した。アナツイの母親は彼が四歳のときに亡くなったため、彼はアンロガへ移り、そこでキリスト教の聖職者であったおじのもとで育てられた。その教会や住居、井戸は今も残っている。

自国文化への目覚め

その後、一九六五年にアサンテ州にあるクルマ科学技術大学に入る。そこで伝統文化への関心に目覚め、アジンクラの技法を学んだ。本来は葬礼用の布であるアジンクラは「別れの挨拶」を意味し、瓢箪（ひょうたん）を削って作った文様の版を布に押して染めたものだ。父親が伝統的な織物、ケンテクロスの高名な職人であったとはいえ、幼少から英国植民地支配の下でキリスト教教育を受けた彼が、自国の文化に目覚めた背景には、一九五七年のガーナ独立があった。アカン語の「sankofa」ということばを彼は教えてくれた。「go back and retrieve」=「過去から学ぶ」という意味で、それをあらわすフォルムはアジンクラの文様にもなっており、独立時のガーナ人の精神的スローガンだったという。そしてアーティストとして歩み出した彼の制作の指針ともなった。

イメージを求める

卒業後、アクラの西、ウィネバの大学で教鞭をとり、一九七五年にガーナを離れ、ンスカのナイジェリア大学へ移ってからも旺盛（おうせい）な制作活動を続け、今日、それは巨大なメタル・タペストリーへと発展している。

わたしたちが本展覧会のための新作のタイトルを尋ねると、作家は困惑気味にタペストリーを眺め続けていた。彼にとってイメージにタイトルをつけることはさほど重要なことではないのかもしれない。アナツイはある取材で「初めてアートを意識したのは、アンロガの小学校で校長室の扉にチョークで文字を書いたときだった」と述べている。ことばの意味もわからぬまま書いた文字、そのフォルム自体がもつ視覚的なイメージに魅かれたという。そのエピソードとイメージそれ自体を求めて自作を見つめる姿が、わたしの眼にふと重なって見えた。

研究フォーラム

インド大躍進の光と影
「現代インド地域研究」プロジェクト

三尾 稔（みお みのる）
民博 研究戦略センター

持続的な経済成長を成し遂げ、世界経済の推進力にさえなりつつあるインド。
いまやその存在感は経済の枠をこえ、政治や文化の面でも高まっている。
古くから独自の文明を生み出しつつ、東西のさまざまな文明が接触し融合する
この地域において、人びとの暮らしはいかに変容しているのか。
インド大躍進の光と影の双方を総合的な観点から研究するプロジェクトが開始された。

高まるインドの存在感

この七月に終わったサッカーのワールドカップ。どの試合でもコート脇にSONYやVISAなど国際サッカー連盟の公式パートナーや公式スポンサーの広告が順番に映し出されていたことをご記憶の方もいるだろう。しかし、そのなかにインド企業が一社入っていたことは案外気づかれなかったかも知れない。この大会で公式のパートナーとスポンサーになった企業はわずか一四社だったのだが、その一角をインドのIT企業が占めていたのである。

ことほどさように、国際的な会議やイベントでのインドの存在感は高まっている。G20首脳会合の参加国となっているうえ、安全保障や国連の議論の場においてもインドの発言力は重みを増している。サッカーの実力はまだまだかも知れないが、世界の西半分では人気の高いスポーツ、クリケットでは強豪国で、そのワールドカップでは来年ホスト国になる。デリーのオリンピック開催地への立候補も、真剣に検討されるに至っているようだ。

インド大躍進の意味

インドの存在感の高まりの背景には、二〇年以上持続する経済成長がある。特に九〇年代後半から実質経済成長率は年率五パーセント台から九パーセント台で推移し、世界的に景気が後退した昨年でもプラス四パーセント台の成長を達成しており、今や世界経済の重要な推進力になりつつある。

大都市のショッピングモール。大都市の一部の景観は先進国と見まごうばかりだ（グジャラート州アーメダバード　2007年10月）

この経済発展はいわゆる経済グローバル化の流れのなかで達成されている。八〇年代末までのインドは資本も生産物も輸入を極力抑える内向的な開発戦略を続けてきた。その政策を転換して自由化を促進し、グローバルな資本・モノ・人の動きにインド社会を直接つなげたことが急速な経済発展を促す大きな要因となったことは、大方の見方が一致している。

しかし、インドの躍進はグローバル化のなかで単に欧米や日本などの先進諸国の経済発展のパターンを追随するだけの出来事なのであろうか。

長期的に見れば、インドあるいは南アジア地域は独自の文明を生み出しつつ、東西のさまざまな文明が接触し融合する領域であった。山岳地帯から、乾燥地帯、湿潤な大平原、さらには沿海地帯まで多彩な生態環境のなかで、多様な民族集団や文明が競合しながら共存の知恵をみがき、独特の人間観や世界観を生み、環境や社会条件に適合した生存様式を育んできた。インドはそれ自体が「ミニ・グローバル社会」であり続けてきたのである。

近年のインド大躍進は、ミニ・グローバル社会で育まれた知恵が現代の歴史的条件のもとで開花した結果と見ることもできる。インドを知ることは、欧米や日本などとは異なる新しい発展経路を発見したり、グローバルな世界で生ずるさまざまな社会問題を解決する鍵（かぎ）をえることにつながる可能性を秘めている。

「現代インド地域研究」プロジェクト

貧富の格差、根強い差別、環境問題などインドの抱える問題もまた巨大である。急激なグローバル化や経済発展そのものが社会にもたらすひずみが、民族的・宗教的なアイデンティティの不安などの問題にもつながっている。グローバル化した世界においては、インドが直面する問題が世界に及ぼす影響もまた大きくなる。

インドの成長の原動力を長期的な視野でとらえ、それが世界に与えるインパクトを解明する一方、躍進がもたらすひずみにも注目しながら、インドに暮らす人びとの生活や文化がどのように変わりつつあるのかを探る。インド大躍進の光と影の双方を総合的な観点から研究する必要が今ほど高まっているときはない。

人間文化研究機構の「現代インド地域研究」プロジェクトは、このような時代の要請にこたえることを目的として今年の四月から始められた。プロジェクトには、民博、京都大学、東京大学、広島大学、東京外国語大学、龍谷大学の六つの教育研究機関が加わっている。各機関は人間文化研究機構と共同で研究拠点を設置し、各々の特色を生かした研究を進めながら、拠点間の研究ネットワークを活性化させて新しい総合的なインド理解を深めようとしている。インド、英米などとの国際的共同研究も大きな使命である。

貧困層の子どもたちへの教育もインドの大きな課題のひとつである（ニューデリーのスラムで　2009年8月）

環流する文化と宗教

民博拠点では、「環流」をキーワードに現代インドの宗教と文化の動態を解明しようとしている。環流は、もとは海流の地球規模の循環を指す用語である。インドを発信源とする宗教やファッション・映画・音楽などに代表される文化は、増大するインド系移民の活躍に合わせて世界各地に伝わり、「インド」イメージを広めている。それだけではなく、世界に流布したインド文化は各地の文化や社会と複雑な相互作用を起こし、それがまたインドに戻ってインドの文化や価値観を変えている。インドの文化や宗教は、グローバルな人や情報の動きのなかでまさに環流現象を起こしているのである。その動きの具体的なあらわれをインドや世界各地の実地調査によってとらえ、インド発の文化や宗教の環流が生み出している新しい価値観を解明することは、先進国発の現象に偏りがちだったグローバル化と地域文化の相互作用の研究に対し新しい視点を提供することにもつながるだろう。

民博拠点は、既に七月にインドの都市の変容をテーマとした国際シンポジウムを開催した。今後もさまざまなシンポジウムを企画しているが、この一二月には変貌するメディアと社会の相互作用に関する公開シンポジウムを東京外国語大学と共催する予定である。

みんぱく
Information

特別展
「彫刻家エル・アナツイのアフリカ ――アートと文化をめぐる旅」

ガーナ出身でナイジェリア在住の彫刻家エル・アナツイ（1944～）は、ヴェネツィア・ビエンナーレにも二度招かれるなど、世界的に注目を集めています。今回は、木彫やインスタレーションなど彼の作品約70点と、それらがどのような文化的な背景から生まれてきたかを示す資料、写真、映像ほか約30点をあわせて展示し、民族学とアート、民族学博物館と美術館の創造的な共同作業の可能性を探ります。

「ビーク」（錫、銅線、2010年、作家蔵）

会期　9月16日（木）～12月7日（火）
会場　特別展示館

■関連イベント

「地球おはなし村によるワークショップとドラムの演奏」
実施日　9月25日（土）
時間　12時～13時
場所　特別展示館 エントランス前広場（雨天の場合、本館エントランスホール）

「ギャラリートーク」
実施日　9月25日（土）
時間　14時～15時
場所　特別展示館
※特別展関連のみんぱくゼミナール及びみんぱくウィークエンド・サロンは13ページ、24ページをご覧ください。

企画展
「歴史と文化を救う――阪神淡路大震災からはじまった被災文化財の支援」

阪神淡路大震災から15年を迎えた今、これまで展開されてきた被災文化財の救出活動を検証し、今後の展望を考える機会にしたいと考えます。
会期　9月28日（火）まで
会場　本館展示場内

「伝統の布の〝いま〟――東南アジアのふだん着にみる実情――」

東南アジアの国々で収集した「四角い布」や「筒型の布」などのふだん着を展示し、グローバル化が進展するなかで変貌をとげつつある伝統の布の実情を紹介します。
会期　9月14日（火）まで
会場　本館展示場内

■関連イベント

「ギャラリートーク」
実施日　9月7日（火）
時間　14時30分～15時30分
※本企画展では、試着コーナーを併設しています。試着可能な日時はホームページでご確認ください。

公開シンポジウム
「文化財をまもる――みんぞく資料をまもる――」
実施日　9月11日（土）
時間　13時～16時40分
場所　講堂（定員350名）
※参加無料、要申込
参加申し込み方法
ホームページ上（左記）の申込フォーム、または氏名（フリガナ）・住所（自宅または勤務先のどちらかを明記）・電話番号・職業・メールアドレス・今後のシンポジウムの案内希望の有無をご記入のうえ、ハガキ、FAX、メールにて事務局までお申し込みください。
http://www.kuba.co.jp/bunkazai-minpaku/
お問い合わせ
事務局　（株）クバプロ　〒102-0072
東京都千代田区飯田橋3-11-15
UEDAビル6F
電話　03-3238-1689
FAX　03-3238-1837
e-mail：symposium@kuba.jp

公開講演
アルブレヒト・レーマン氏（ハンブルグ大学終身教授）講演会
「神秘化された森と環境保護運動 ――ドイツの事例より」
実施日　9月25日（土）
時間　13時30分～16時30分（開場13時）
場所　第5セミナー室（定員100名）
※講演はドイツ語。日本語字幕を放映します。コメント・質疑応答は通訳あり。
※参加無料、要申込
参加申し込み方法
メールで「9月25日講演会希望」、住所・電話番号・氏名（フリガナ）をご記入のうえ、左記までお申し込みください。（先着順）
e-mail：fsj.sympo2010@gmail.com
（このメールは、日本民俗学会国際交流事業担当で、お問い合わせにも対応します）

公開講演会
「世界の結婚事情 ――セネガル、中国、フランスから考える」
晩婚化現象が進む日本において、結婚や夫婦がもつ意味が問いなおされている。世界各地の結婚のありかたや夫婦の関係、それらを規定する制度を手がかりにしながら、文明の土台となってきた夫婦という人間関係について多面的に考えてみたい。
実施日　10月29日（金）
時間　18時～20時50分（開場17時）
場所　日経ホール（東京都千代田区大手町1-3-7日経ビル3階）（定員600名）
※参加無料、要申込
※手話通訳あり
参加申し込み方法
「10月29日公開講演会参加」と明記し、氏名・郵便番号・住所・電話番号・今後の講演会などの案内送付希望の有無をご記入の上、ハガキ、FAX、メールにて左記「研究協力係」までお申し込みください。（友の会会員の方は、会員番号をご記入ください。）
FAX　06-6878-8479
e-mail：koenkai@idc.minpaku.ac.jp
お問い合わせ
研究協力課研究協力係
電話　06-6878-8209
（平日9時～17時）

みんぱくラジオ ～世界を語る～
みんぱくの研究者のお話をラジオでもお楽しみいただけます。
ラジオ大阪（1314kHz）
毎週水曜日　23時30分から24時
※詳細については、みんぱくホームページをご覧ください。

刊行物紹介

■М.В.МОНГУШ　著
『ТУВА ВЕК СПУСТЯ ПОСЛЕ』
国立民族学博物館調査報告NO.92

■Guillaume Jacques/Chen Zhen　著
Yasuhiko Nagano　編
『Une version rgyalrong de l'épopée de Gesar　Gyarong Studies 1』
国立民族学博物館調査報告NO.93

みんぱくゼミナール

会場　国立民族学博物館 講堂
時間　13時30分～15時（13時開場）
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料
※展示をご覧になる方は、観覧料が必要です。

第388回　9月18日（土）
【特別展関連】
博物館と美術館の間
――美術から見える現代アフリカの居場所
講師　川口幸也（文化資源研究センター准教授）

アフリカの現代美術は、博物館に展示されたり美術館に展示されたりしています。このような現象は、欧米や日本の現代美術には見られません。アフリカの現代美術が置かれているこうした状況をてがかりにして、世界における今日のアフリカの問題を考えてみます。

第389回　10月16日（土）
【特別展関連】
西アフリカ――アートと歴史の交差点で
講師　竹沢尚一郎（先端人類科学研究部教授）

「父と子」（木、金属、彩色、1991年、作家蔵）

エル・アナツイは、ガーナ生まれ、ナイジェリアで活躍する、世界的な現代美術のアーティストです。彼の作品は、どのような歴史的・文化的背景から生まれ、それからどのように飛翔しているのでしょうか。彼の作品をより深く理解するために、お話しします。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話06-6877-8893（平日9時～17時）　FAX06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会
会場　国立民族学博物館 第5セミナー室
定員　96名（当日先着順、会員証提示）
第388回　10月2日（土）
特別展「彫刻家エル・アナツイのアフリカ」関連
美術に映るアフリカの位置
――エル・アナツイのアフリカ
講師　川口幸也（文化資源研究センター准教授）
時間●14時～15時
美術品はふつう美術館に展示されます。ところが、アフリカ美術の場合は必ずしもそうではありません。現代アフリカを代表する彫刻家として名高い、ナイジェリアのエル・アナツイの作品世界をたどりながら、アフリカが置かれている位置を考えます。
※講演会終了後、特別展見学会があります。
第389回　11月6日（土）
レヴィ＝ストロースは20世紀に何をもたらしたか
講師　竹沢尚一郎（先端人類科学研究部教授）
時間●14時～15時30分
レヴィ＝ストロースは20世紀最大の知識人のひとりといわれています。彼の影響は、人類学はもちろん、哲学、思想史、精神分析、社会学など、さまざまな分野に及んでいます。彼の影響がそれほどひろがった理由は何かを考えてみましょう。

万博公園賑わい創出事業
演奏会「1000人で音楽をする日。」
楽器ができる人もできない人も、歌が上手な人も苦手な人も、リズム感がある人もない人も、みんないっしょに集まって1000人で大演奏会！竹や木の楽器と声が生み出す音の波で「太陽の塔」をふるわせましょう。この演奏会はあなたがもっている音と音楽の認識をきっと変えてくれます！
日時●10月23日（土）13時～（雨天中止）
会場●万博記念公園 自然文化園 おまつり広場
参加費●無料（自然文化園入園料が別途必要です）
お問い合わせ　財団法人千里文化財団
電話　06・6877・8809・3
ホームページアドレス
http://www.senri-f.or.jp/udlot_udlot/
http://www.1000ongaku.com/

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

電話　06-6876-3112
FAX　06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

あなたのアフリカをもって帰ろう！

特別展「彫刻家エル・アナツイのアフリカ――アートと文化をめぐる旅」の開催にともない、特別展示場内に特設ショップをオープンします。
特設ショップのテーマは「伝統的なアフリカの布」。表情豊かで生命力みなぎる素材やデザインの布たちとそれらを用いた布小物を中心に、身近にあると楽しくなるアフリカングッズ、布やデザインに関する書籍など、色んなアフリカを集めています。
あわせて、本館ミュージアム・ショップのアフリカグッズコーナーもさらに充実させました。どちらのショップにもどうぞお越しください。

クバ布　12,600円
ボゴラン ランチョンマット　1,260円
パーニャ ブックカバー　1,575円～
パーニャ ポーチ　2,625円

世相史を語る台湾故事館

久保 正敏 民博 文化資源研究センター

台湾故事館入口

展示の方法のひとつに情景再現、生活再現とよばれる手法がある。一九世紀初頭、パノラマ絵師で後に写真発明家となる、かのダゲールが考案したジオラマもその一種だが、なかでも実物大の三次元空間を設定し人がそこに入り込めるタイプの再現展示は再現効果が大きい。屋内型と野外型にわけられるが、前者は室内型テーマパークともよばれ、また後者は、野外博物館もその範疇と見れば歴史は古い。

日本における屋内型再現展示

日本における大規模な屋内型では、一九八六年開館「深川江戸資料館」や一九八九年開館「広島県立歴史博物館・草戸千軒」が開館時に話題を集めた。民博に近いところでは、二〇〇一年開館「大阪くらしの今昔館」や「大阪歴史博物館」にも、屋内随所に再現展示がある。また民博で二〇〇二年三月～七月に開催された特別展「２００２年ソウルスタイル――李さん一家の素顔のくらし」も屋内型再現展示が中心だった。わたしが最近訪れた台北にも、同じコンセプトの室内型テーマパーク「台湾故事館」がある。

ビルの地階にひろがる異空間

二〇〇五年に開館し、「一九六〇年代の台湾の純朴さ、歴史、人びと、生活を一五〇〇坪の空間に隅々まで細やかに再現、アジア最大級の屋内アミューズメント」が売り文句。ショッピング・ビルの地下一階、入口は百均ショップ（換金レート通り三九元均一の表記が妙）看板の下、階段を降りると、そこは昭和三〇年代の日本に驚くほど似た街並みが再現された異空間。懐かしいマツダの三輪トラックや小型乗用車の現物、蚊や蠅撲滅キャンペーン看板、木製ゴミ箱、タイガーバウムのほうろう看板や、美空ひばり主演『リンゴ園の少女』、ディズニーアニメ『白雪姫』、『君の名は』にそっくりな『相逢台北橋』の映画広告がある。映画館や写真館、そして当時の台湾海峡危機を反映してか防空壕もしつらえてある。

映画看板

街並み再現

没入感の是非

現地人の入館者が少ないようだったが、過去に関心のある世代が少ないからだろうか。わたしには、日米中の影響をうかがわせる当時の雰囲気がしのばれて興味深かった。雑居ビルの低い天井に圧迫感を覚えたが、空間に入り込むにつれ気にならなくなった。かように再現展示は、モノに触れつつ空間に没入し疑似体験できる力をもつ。それゆえか、過去の再現展示は、高齢者の脳トレのひとつ「再現法」に有効と最近注目されているが、その一方、観る側の選択権、想像力を奪ってしまう危険もあるのか。むかしから展示技法に関する論点のひとつではある。

みんぱく 私の逸品

マヤの貫頭衣（女性用ウィピル）

標本番号 H0152180
地域 グアテマラ共和国 チマルテナンゴ県 パツン
受入年 1987年

民博 文化資源研究センター 園田直子（そのだ なおこ）

一九九五年の阪神淡路大震災では、みんぱくも、さまざまな被害を受けました。なかでも資料の保存上もっとも深刻だったのが、展示場のスプリンクラーのヘッドが地震の衝撃で外れ、一〇トンあまりの水が流出した事故です。床から漏れた水は階下に達し、秋の特別展に向けて仮置きしていたマヤ資料の一群が被害を受けたのです。

マヤ資料には、輪をえがくように黄色から茶色の水じみがでていました。地色が濃い衣類の場合、そのままでは見えにくいのですが、紫外線をあてると水じみの縁に沿って黄色の蛍光が観察できます。漏水箇所近くの資料一二四点のうち、約三分の二が、輪じみ、染料の色おちなどの被害を受けました。水には鉄イオンが含まれていたため、繊維を劣化させないためにも、鉄イオンが除去可能なうちに資料を洗浄する必要があります。

保存状態が良く色おちの恐れが少ない資料は、超音波で洗浄することにしました。問題は、耐水性のない色糸で刺繍（ししゅう）が施されている資料です。水溶性の鉄イオンは除去しながら、色糸からの色おちは最低限におさえるという、相反する条件を満たさなければなりません。試行錯誤の末、資料全体を純水に浸すのではなく、部分によって洗浄に使う純水の量を調節できるよう、高吸水性ポリマー入りシートの上で水洗することにしました。高吸水性ポリマーは、多量の水を吸収し、また加圧しても水を逃さない特徴をもつ合成樹脂で、身近なところでは紙おむつにも使用されています。この手法により、特別な洗浄や排水の設備がなくても、多量の水を使った応急洗浄が可能となりました。

みんぱくの保存科学では、大規模な設備だけに頼らず、ひとや設備に制約のある被災時のような場合でも、必要なことは何とかするという柔軟性、応用力を重視しています。その原点となった経験が、これらマヤ資料の冠水事故です。

関連企画展のお知らせ

歴史と文化を救う——阪神淡路大震災からはじまった被災文化財の支援
会期：9月28日（火）まで開催中
会場：国立民族学博物館企画展示場A

さまざまな災害における支援活動の過程を、実際に被災した文化財とともにふりかえります。研究者や専門家による的確な応急措置や修復技術が示されます。また、ボランティア活動を通じて地元の文化を再認識し、人びとが元気をとりもどしていく様子もみてとることができます。そして、これまでの事例をもとに、今後の災害に備えるさまざまな取り組みも紹介します。

散策と思索の径

よみがえる「華洋雑居」の記憶・上海

井口淳子（いぐちじゅんこ）
大阪音楽大学教授

今年五月に開幕した上海万博。会場となっている上海は、成長著しい中国の現在を代表するとともに、重ねられた歴史を映し出す街でもある。アヘン戦争後、列強諸国はこの地で勢力を競い、日本もその一翼を担った。この都市と日本人とのかかわりに思いを馳せながら、当時の痕跡が今も残る上海の小径を歩く。

旧フランス租界に続々と出現する洋館レストラン。飲食文化も華洋雑居になりつつある

「草刈義人資料より『昭和17年ごろの上海交響楽団』」写真（東京藝術大学附属図書館所蔵）

上海音楽学院（旧ユダヤ人クラブ）

蘇州河をわたると

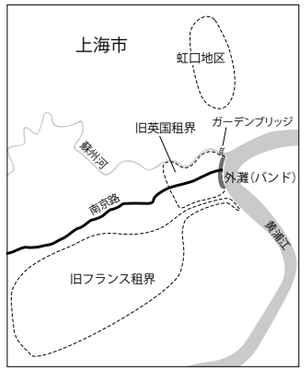
上海については、メディアで頻繁にとりあげられているうえに、映画やテレビドラマの舞台としてその様子を目にすることも多いのだが、一歩進んで日本人と上海が深くかかわった租界（アヘン戦争後、欧米列強が借りあげ治めた地域）について調べようとすると、膨大な書籍のなかから何を読めばよいのか途方にくれてしまう。

戦前には、長崎と上海のあいだに定期航路がもたれ、一昼夜で、この「華洋雑居」の都市に到着することができた。多い時期で一〇万人もの日本人居留民が暮らしたのは、英仏など西欧がつくりあげた租界中心ではなく、蘇州河（そしゅうが）をわたると風景が一変する、虹口（こうこう）（ホンキュー）地区であった。

つかの間の主

日本人街があった虹口地区からガーデンブリッジとよばれる長い橋をわたるとそこは旧英国租界である。上海のランドマークとされる華麗な建築群が黄浦江（こうほこう）にそって立ち並び（バンド・外灘（ワイタン））、メインストリートの南京路が西にのびている。船で上海を目指した人びとにとってこのバンドの風景はむかしも今も心躍らせるものであろう。

ながらく租界の隅に住み続けた日本人。しかし日中戦争はそんな租界の地図を塗り替えることになる。租界時代末期、日本軍が租界全域を制圧した一九四三年以後、日本人が租界のつかの間の主となり、欧州人といえば、亡命ロシア人とユダヤ系難民になっていった。



花開く劇場文化

そんな戦時下の上海ではあるが、意外なことに、日本内地では考えられないような「劇場文化」が高揚期を迎えていた。亡命ロシア人、そしてドイツ、オーストリアなどから逃れてきたユダヤ系音楽家がメンバーである最高レベルのオーケストラをはじめとしてバレエ、オペラやオペレッタ、中国人による先進的な演劇が公演を続けていたのである。

そんな租界を体感させてくれるのが、上海で暮らした小説家たちの作品群である。武田泰淳（たけだたいじゅん）が自身の一九四四から四五年の租界生活を描いた『上海の螢』（一九七六年、中央公論社）では、登場人物が敗戦直前に語る場面がでてくる。

「『もう東京には芸術はありませんよ。文化もありません。（中略）上海には、いや、上海にこそ芸術があるんですよ。白人も東洋人も、ここでは坩堝（るつぼ）の中のように煮えたって、溶け合って、新しい何かを創りだしつつあるんです。ライシャム・シアター、小さい劇場です。中国風に読めば、蘭心劇場ですがね。あそこで各民族の芸術の粋を集めた祭典を、われわれは創りださなくちゃならない』（中略）そして彼の自慢する本格的な交響楽団、本格的なバレエが上演され、演奏された。」

この「彼」とは実在のオーケストラの支配人、日本軍による文化工作の協力者として、戦時においても劇場公演を続けていた人物である。彼が日本にもち帰り、遺した資料は、小説中のことばが事実そのものであったことを実証している。

上海市民のものに

さて、南京路を西に進むと旧フランス租界にいたる。わたしにとってなじみ深い上海音楽学院は、フランス租界のユダヤ人クラブの建物を大切に使っており、そこから旅宿に帰る二〇分ほどの道の途中には国泰電影院（キャセイ・シアター）や蘭心大戯場（ライシャム・シアター）が往事の姿のまま営業を続けている。

蘭心大戯場では日本敗戦の直前まで、定期演奏会やさまざまな芸術公演がおこなわれていた。それを楽しんでいたのは中国人であり、租界文化はついに上海市民のものとなったのである。

そんな街路を戦前の租界地図を片手に歩いてみると、上海という街がたどったこの一〇〇年の複雑な素顔に、ほんの少し近づけるかもしれない。

ライシャム・シアター 2009年9月公演チラシ

黄浦江西岸の風景（バンド）

多文化をささえる人びと

足元から多文化共生を積み上げる

世代交代したAPFSの今とこれから

ニューカマー外国人が急増した1980年代後半、日本人住民と外国籍住民の「相互扶助」の理念のもと、東京の板橋区で産声をあげたAPFS（Asian People's Friendship Society）。設立20年余を経て、この春世代交代した若手リーダーたちに同団体の今とこれからを聞いた。

渡戸（わたど） 一郎（いちろう）
明星大学教授

在留特別許可取得行動をささえる

APFSといえば、一九九九年初秋から三次にわたっておこなわれた、「在留特別許可取得一斉出頭行動」でご存じの方もいるかもしれない。日本ですでに長期間非正規に滞在している家族や単身者たちが、退去強制されるリスクを覚悟のうえで、在留資格の正規化を求めて法務省入管局に集団出頭した行動を、全面的に支援し、全国規模の運動を展開したのだ。そのうち一定数の家族が在留特別許可をえた。こう書くと、APFSが戦闘的な社会運動団体であるかのように聞こえるかも知れないが、じつはこの運動は、九〇年代前半から労働・生活面で非正規滞在外国人の相談を受け、支援を重ねた結果から必然的に生まれたものだった。「長年真面目に暮らし働いてきたこれらの人びとの日本滞在を、世紀が変わる前に政府に認めてもらいたい」。その願いは一定程度認められ、以後、入管局も「在留特別許可のガイドライン」などを発表するようになった。

当事者性の尊重に立つ活動

身近な「隣人」としての外国籍住民とともにつくる社会を目指すAPFSの会員は、累計で三三五〇人にのぼる。役員構成も多国籍で、フィリピン・ビルマ・バングラデシュ・パキスタン・イランからの外国人九人と日本人四人。平均して一五～一六人いるボランティアは外国人・日本人半々だ。

APFSの日常活動は、(1)外国人相談と(2)多文化共生に関するイベントの開催を車の両輪としている。相談は在留資格の有無にかかわりなく受け、年間一〇〇〇件前後で推移しているが、定住化の進展を背景に相談内容が多様化している。一方、イベントの方は、①地元商店街などとともにおこなう「アジアンフェア」、②移住労働者問題のシンポジウム、③当事者である外国籍会員主体の「シェア・ミーティング」の三つからなる。とくに「シェア・ミーティング」は月一回開かれ、毎回二〇～三〇人の参加がある。これまでに話しあったトピックは子育て、子どもとのコミュニケーション、日本の教育システム、PTAと町内会、防災、老後、仕事だが、特に年金と医療制度についてもっと知りたいという要望が多かったという。今後、リーダーの人材育成講座を通じて自助活動に発展することが期待されている。

組織の強みと課題

今年度から代表、副代表となった加藤丈太郎さんと吉田真由美さんによると、APFSの強みは、当事者とともに活動し問題解決に取り組んでいること、また「顔の見える関係」を通して各外国人コミュニティと直接つながり、当事者のニーズが把握できることだという。この背景には、相談をもち込んだ人が問題解決後もボランティアとして相談活動などに参加していることが大きい。

一方、課題も多い。まず、目の前の多くの問題に追われて、中長期的な視点に立つ活動のための分析に手が回らないことだ。また、非正規滞在者問題に取り組むなかで、いかにして支援の輪を広げていくかも課題となっている。こうしたことを踏まえ、APFSはNPO法人格取得により組織基盤を整え、近い将来に有給の外国人スタッフを置くことを計画している。また、子ども、DVを受けた女性、難民などに対する相談にも取り組みたいという。

「個」を起点に足元からの多文化共生を

最後に若いリーダーのお二人に、これまでの活動経験を踏まえて、多文化共生についての考えをうかがった。「目の前の外国人と日本人がひとつひとつ関係を積み上げていくこと。そこには摩擦も起きるかもしれないが、それも含めて相互に理解し合っていくこと」と加藤さん。一方、吉田さんの回答は「日本人同士でも多様なことを踏まえて、〈いろんな人がいて当然の社会だ〉ということを皆が理解していくこと」。具体的には、例えば非正規滞在の外国人でも、子どもの教育に熱心な父親だったり、仕事の熟練者だったりと、多面的な側面をもつ「個人としての外国人」であることをどのようにして社会に見せていくかが課題だと、強調されていたのが印象的だった。

こうしてインタビューするうちにも、狭いAPFSの事務所には外国人、日本人のボランティアスタッフたちが次々にやってくる。しかし活気あるこの事務所はいまや手狭だ。複数の助成金など、さまざまな資金源を確保しながら運営されてきたAPFSがさらに発展していくためには、相談コーナー、たまり場スペースをもつ事務所の拡張が課題だ。だが、そのための財源確保は簡単ではない。

外国につながる子どもたちを応援するコンサート

アジアンフェア

クリスマスパーティ

在留許可を求める銀座パレード

CALENDAR 九月 第30回

歳時世相篇

敬老精神

高齢期の社会における位置づけは、
時代の変化やそれにともなうライフスタイルの変容、
さらに地域の文化的背景などにより多様である。
日本発の記念日「敬老の日」の名称も、
「母の日」などと違い他国ではみられないという。
文献から過去を紐解くとともに、海外の事例を通して、
高齢者と共に過ごす時間について考える。

鈴木七美（民博 先端人類科学研究部）

「敬老の日」から「老人の日」へ

「敬老の日」（九月の第三月曜日）は、日本では国民の祝日である。祝日法改正（ハッピーマンデー制度 二〇〇三年）によって、かつて「敬老の日」だった九月一五日は、「老人の日」となり、同日より一週間は老人週間となっている。「敬老の日」の始まりは、一九四七年に兵庫県の野間谷村（現在の多可町八千代区）で定められた「としよりの日」（九月一五日）だとされる。「老人を大切にし、年寄りの知恵を借りて村作りをしよう」と、農閑期で気持ちのよい季節に敬老会を開いた。これが兵庫県から全国に広がった。祝日法では、「多年にわたり社会につくしてきた老人を敬愛し、長寿を祝う」ことが目的とされている。これは、ライフスタイルの変化によって、村から都市へ移動する若者世代が増加し、高齢者と共に過ごす時間が減少しつつあるという認識に基づくものであったかもしれない。二〇〇三年のあらたな呼称「老人の日」は、「国民の間に広く老人の福祉についての関心と理解を深めるとともに、老人に対し自らの生活の向上に努める意欲を促す日」と説明されており、「ケアの対象としての高齢者」および「高齢者の自助や自己形成」を謳っていて、社会の少子高齢化のもとで高齢者福祉が課題となっていることが示唆されている。

近代以前の人生区分

高齢期の社会における位置づけは、人生区分に関する思想にも表現されてきた。一六世紀西洋では「人生の階段」という形式をとる図像が登場した。たとえば近代教授学の父とされる一七世紀のコメニウス「人間の七つの年齢段階」（『世界図絵』）は若い世代を頂点とする階段の図であるが、高齢者はその右端から離れて立ち去って行くように描かれている。それは、次の世代に重なりつつ生かされるライフサイクルに包摂される人のイメージではない。

六～七世紀セビリャ司教イシドルスの「人間の年齢について」（『語源』）には、人生区分はもとより語彙に考証が展開されていた。七〇歳以上が「元老」、五〇歳から七〇歳は熟年期で、「成熟した判断力においてもっとも熟した年齢」＝「人生の成熟期」とされている。他方、二八歳から人生の半ばころの三五歳を経て四九歳まで続く若者期は、「雄牛のような力」をもつことにより、ようやく「人を助けることができる」ようになる時期にすぎない。

遡って、治療活動の出発点として人間の自然性を考察した紀元前五～四世紀ギリシャのヒポクラテス「箴言」では、「季節に関していえば、春と初夏は、子どもと若者がもっとも元気で健康であり、夏と秋の中ころまでは老人が、また晩秋と冬には中年の人がもっとも元気で健康である。」と環境や季節などマクロコスモスと呼応する人生が語られていた。

デッキでの食事会は知人、友人、近所の人が「ポットラック」で楽しむ時間である。北国のカナダでは、寒い季節でも、ロウソクやランプの灯のもとに集う。家のなかを通らずに参加できるので気楽に招待しあうことができる（この日は南仏風のテーブルクロスで。モントリオール 2003年9月）

「人間の七つの年齢段階」（『世界図絵』）

位置づけの変化

だが、近代以降の人生区分表現を辿ると、若者期の縮減と老年期の権威失墜が顕著になってくる。シェークスピアの『お気に召すまま』の人生区分の老年期は「耄碌時代」と揶揄され、七段階目は「第二の幼年時代」と表現されている。この三月にスウェーデンで聞いた高齢者福祉の問題点も、こうした高齢期の位置づけとかかわっているだろう。この国では、皆が働くことによって社会福祉を充実させることが重視されてきたので、高齢期に余生を楽しむというよりも社会貢献していないと気力を失うケースが多くみられるという。世俗化が進み教会も求心力を失っている近年、生活支援や緩和ケア支援に限定されない高齢者へのケアが模索されている。

大切にする気持ち

「敬老の日」は日本発で、日本以外の国々にはないとされている。確かに、毎年訪ねているアメリカ合衆国、カナダ、デンマークでは、そのような記念日はみあたらない。「敬老の日」について質問すると、「母の日」や「父の日」の話をする人がほとんどだ。カナダの友人は、もっとも近い日として「祖父母の日」をあげたが、高齢者を大切にする気持ちは、年金、運賃や医療費における高齢者用の設定などによって常に表現されているという考えを述べていた。デンマークに関するデータによると、親と同居している割合は日本より低くても、親を訪ねる頻度は高い。記念日に限らず退職後の人びとの生活を考えたり、交流しようという生活スタイルは、同居するか否かということよりも、世代間の関係性を考えるうえで重要な観点であろう。

ここ数年、高齢者が住みやすい街としてデザインされたライフケア・コミュニティを、カナダやアメリカに訪れている。夕方からの食事会に招かれて出かけると親たちや友人・知人たちがやってきていることも多い。それぞれが料理やスナックをもちよる「ポットラック」のガーデンパーティに、庭の垣根の向こうから、近隣の人びとが加わることも珍しくない。こうした気楽な集まりは、退職後の人びとが日常生活において交流する賑やかな機会となっている。海の向こうのあらたな知人たちとの夕食会に小さなアペリティフを加えようと、わたしは毎回「かりんと」や「あられ」など駄菓子で膨らんだ不思議なトランクを抱えて旅立つ。

近年、老人の孤独死をきっかけとしてパリで始まった「隣人祭り」は、一年に一度、戸外の長テーブルに料理をもちより隣人がおしゃべりする機会を作ろうというものだが、急速に世界の多くの都市に広がりつつある。家族に限定されない人びとの交流は、誰にとっても、新しい楽しみを運んでくるに違いない。

フィールドで考える

あんたはウジャンジャ

小川（おがわ）さやか
民博 機関研究員

人によって変わるモノの値段

タンザニアのムワンザ市の路上には、マチンガとよばれる商人がいる。わたしは当初、彼らから買い物をするのが苦手だった。定価販売があたり前の日本とは違い、タンザニアでは何を買うにも値段交渉が不可欠だ。これは大変なストレスである。マチンガは、お金をもっていそうな外国人には、仕入れ価格の何倍もの値段をふっかける。日本人のわたしにとって値段交渉は、その都度、「ぼられた」「騙（だま）された」と憤ったり、「よそ者」であることを意識させられる嫌な機会だった。

しかしマチンガの調査をすすめるうちに、「誰でも一律の値段で商品を購入できること」のほうが不思議に感じられるようになってきた。しかしそれは、圧倒的な経済格差を生み出すグローバル資本主義経済の暴力を自覚し、高値での購入を受け入れることができるようになったためではない。彼らから生き生きと値段交渉をする秘訣（ひけつ）を学んだのである。

路上商人で道幅が狭くなったマコロボーイ通り

その時々によって変わる値段

二〇〇一年に調査をはじめたわたしは、マチンガのひとりRと古着の行商をすることにした。マチンガのことを知るには一緒に商売をするのが早いと思ったのだ。ある日、わたしは、Rが客によって販売価格を変えていることに気づいた。Rは裕福なインド系商店主と銀行員からは、古着一枚あたり一〇〇〇シリングの高利益をえた。いっぽう貧しい路上惣菜（そうざい）売りの女性からは利益をえるどころか、二〇〇シリングの赤字だった。両者に販売した古着の質は同じだったし、仕入れ価格も同じだった。Rは言った。「無いところからはとれないから、有るところからなるべく多くふんだくるんだよ」。

ただ、裕福な者でも「田舎から親戚（しんせき）が無心にやってきて、今月は苦しいんだ」などと訴えると、安値で買えたケースもよく目にした。マチンガとの商交渉は、どうやら所得や地位によって価格が決まっているのでもないようだ。そのときの「生活の苦しさ」を訴えれば、裕福な者でも価格を下げてもらえるのである。マチンガはこのような価格操作を「リジキをわけあう」と表現した。リジキとはスワヒリ語で「その日を生き抜くために必要なもの」を指す。

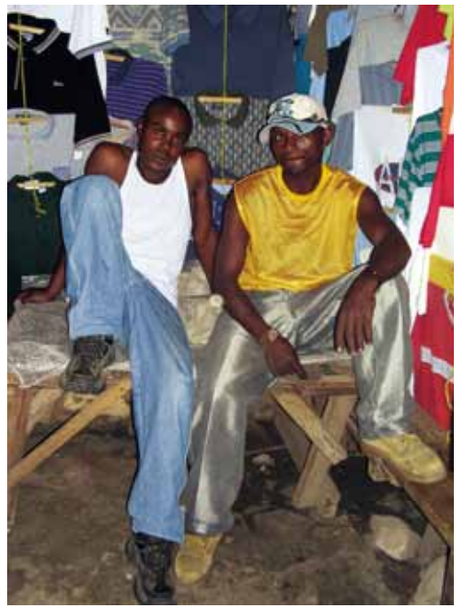
わたしにはこの意味がよく理解できなかった。腑（ふ）に落ちないことがあったからだ。それは、値段交渉での訴えが嘘か本当かなど誰にもわからないのではないか、ということだった。

カトゥングル定期市遠景

心を動かした代金

一年も経つと、わたしはRとさまざまな連携プレーを演じるようになっていた。例えば次のようなものだ。まずわたしが客の言い値に対して「絶対に負けられない」と突っぱねる。それに対してRが「でもこの客は困っているようだから、二〇〇〇シリングだけ負けてあげなよ」と説得する。わたしは「それじゃ赤字じゃないの」と嘘をついてごねるが、適当なところでしぶしぶRの説得に応じる。すると客は、自らが提示した値を諦（あきら）め、二〇〇〇シリングだけ安い価格で喜んで購入する気になる。そのうえ、客は赤字で販売してくれたと信じて、わたしたちに感謝までしてくれるのだ。

ただ時々この仲間割れ作戦が見抜かれてしまうこともあった。マチンガに狡猾（こうかつ）なイメージを抱いている客は、常に「あれは無邪気なのか、それとも計算なのか」と疑いつつ交渉をしているためだ。しかし演技に込められた計算高さが露呈しても、マチンガは決してひるまない。それどころか徹底的に貫くことで、計算高さを滑稽（こっけい）さや悲哀に昇華させようとする。例えば、「何を言っても通じない田舎者はちょっと面白い」、「必死になってゴマスリするお調子者の姿はむしろ哀れだ」というかたちに。マチンガには、「計算だってわかっているけれど、憎めない」と許されることも交渉術のひとつであった。


市内の古着常設市場のマチンガ

客は、マチンガの演技に気づきつつも購入を決めたときには、「まったくもう仕方ないな」という、にやにや笑いや肩をすくめる身振りとともに、「あんたはウジャンジャだ（賢い／ずる賢い）」と評価する。このときの双方の感覚は、「騙した」、「騙された」というのとはちょっと違うようだ。彼らにとって本当か嘘かは重要ではないのだ。マチンガは客の心を動かそうと努め、客は心を動かされた対価としてカネを諦めたのだから。この場合、「心を動かされたとき、心を動かした相手に対していくら払えるのか」が重要なのだ。

こうした商交渉を、マチンガたちは、「俺たちのおかげで、客はその時々の状況に応じてものを買うことができている。それでこの世界はうまくまわっているんだ」と自信満々に語る。そして、これが「リジキをわけあう」ということなんだぞと。

9月

みんぱくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■時間　14 時 30 分から 15 時 30 分（予定）
■展示観覧料が必要です。
※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」
などなど、話題や内容は千差万別！
どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。

5日（日曜日）
話者：園田直子（文化資源研究センター教授）
話題：環境問題と博物館の「やさしい」関係
場所：本館展示場内東南アジア休憩所

12日（日曜日）
話者：須藤健一（館長）
話題：伝統貨幣とともに生きるミクロネシアの人びと
場所：本館展示入口

19日（日曜日）
話者：森明子（研究戦略センター教授）
話題：【公開講演「神秘化された森と環境保護運動――ドイツの事例より」関連】
ドイツ人と森
場所：本館展示場内東南アジア休憩所

26日（日曜日）
話者：竹沢尚一郎（先端人類科学研究部教授）
話題：【特別展関連】
アートと歴史のはざまから
――エル・アナツイのアフリカ展によせて
場所：特別展示館

「梅棹忠夫先生をしのぶ会」開催のお知らせ

日時：平成22年10月20日（水）13時30分～16時30分
場所：国立民族学博物館エントランスホール

さる7月3日に逝去された梅棹忠夫先生を「しのぶ会」を開催します。ご遺族のご希望もあり、多くの方が参列できる簡素な会とし、式典は催さずに献花によって先生への思いをあらわすことと致します。湯茶のみにて飲食等は用意致しません。また、ご供花・ご香典等はお断りさせていただきます。ご希望の方は、ご参列下さい。

当日は、梅棹忠夫先生が調査研究に赴かれた地域の展示場等に、先生のお写真を展示し、講堂では、民博創設以降の式典等での先生のお姿を約20分の映像で映写する予定です。また、セミナー室でも、先生のご講演や対談の映像を放映する予定です。当日は休館日ですが、特別に本館展示場を開館いたします。詳しくは10月号にてご案内いたします。

編集後記

炎暑の8月は過ぎたが、ここ数年、すでに亜熱帯化しているに相違ないと思わせるほどの暑さの日本列島、熱帯性の伝染病や動植物の侵入が日常となる日も近いのではなかろうか。とまれ、暦のうえでは夜長の季節、8月という祭りの後に、芸術や人生をじっくり見直す機会到来である。

特集で取り上げた特別展のねらいのひとつは、美術館と博物館の関係を見直し、創造的協力を考えることだという。美術と民族芸術や工芸との違いは何か、芸術性は誰が判定するのか、絶対的な美的価値は存在するのか、美は共有されうるのか、作品の市場価値が決まる仕組みは、等々、わたし自身の抱くさまざまな疑問について、あらためて考える機会としたいと思う。

そのヒントのひとつは、エル・アナツイ氏の「廃品に宿る人と人のつながりが作品に力を与える」とのことば。見る人の想像力が生み出す感動が、芸術性の源であることを、あらためて教えてくれるように、わたしには思える。（久保正敏）

先月号（2010年8月号）6ページ「ゴング――伝え交わる音」の下段13行目「一方、東南アジア大陸部では……」は、「一方、東南アジア島嶼部では……」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

●表紙：空き缶のふたを縫い合わせた作品「ピーク」（錫、銅線 2010 年）を展示するエル・アナツイ

次号の予告

特集
梅棹忠夫とみんぱく

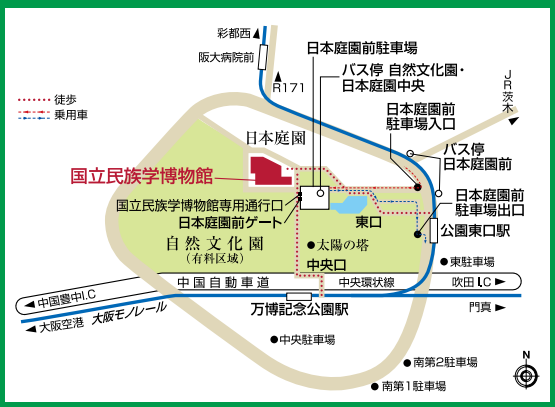
月刊みんぱく　2010 年 9 月号
第 34 巻第 9 号通巻第 396 号　2010 年 9 月 1 日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒 565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話　06-6876-2151

発行人　西尾哲夫
編集委員　久保正敏（編集長）　朝倉敏夫　樫永真佐夫　庄司博史　中牧弘允　山中由里子
編集アドバイザー　山内直樹
デザイン　宮谷一款
制作・協力　財団法人 千里文化財団
印刷　日本写真印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください）。
●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/